加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要 11

平成 19 年 (2007) 9 月 30 日 貝 塚 市 教 育 委 員 会

1. はじめに

加治・神前・畠中遺跡は、弥生時代~中世にかけての集落跡である。貝塚市北部に位置する畠中、加神、海塚、新町、脇浜、石才地区に広範囲にまたがる遺跡で、北は海岸段丘とすぐ大阪湾となり、近木川と見出川に挟まれた中位段丘に立地する。

調査区に近接する道路あるいは庁舎等建設に伴う調査では、弥生時代の井戸、古墳時代前期の掘立柱建物跡、 後期の竪穴住居跡、飛鳥、奈良、平安時代では掘立柱建物や竪穴住居、井戸、溝等を検出し、集落の中心部であったことが判明した。また、奈良時代の大型井戸、石帯や硯の発見等特殊な施設の存在が考えられている遺跡である。今回の調査地は中位段丘上で近木川右岸に位置する。調査地の現状地盤高は、T.P.20.80 mである。

周辺の遺跡としては、東に中世の集落跡である福田遺跡、中世から近世にかけての集落跡である新井・鳥羽北 遺跡、弥生時代の散布地であり室町時代の集落跡が確認されている新井・鳥羽遺跡がある。

北東には中世の集落跡である堀秋毛遺跡、中世・近世の集落跡の東遺跡がある。北西には縄文時代〜近世にかけての遺物散布地、生産遺跡の脇浜遺跡がある。製塩土器が多数出土しており、製塩にかかわる遺跡である。南側には、地蔵堂丸山古墳、地蔵堂廃寺が存在する。ともに近木川を挟んだ左岸に位置する。

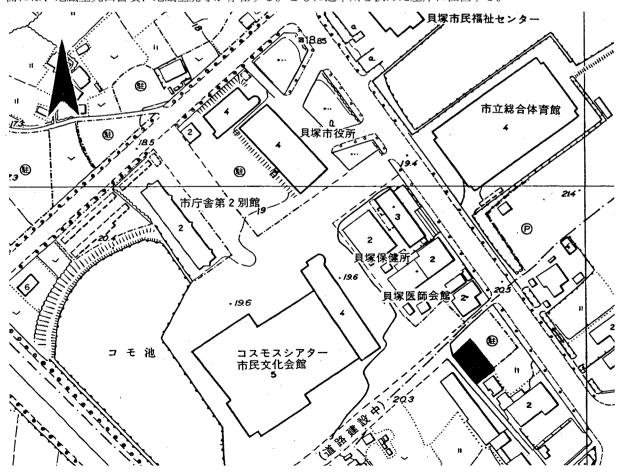


図1 調査位置図(縮尺1/2500、北方向は座標北)

北に位置する貝塚寺内町遺跡は、願泉寺を中心とする近世都市遺跡である。江戸時代になるとト半家によって 貝塚寺内の支配体制が強化され幕府より自治が認められた。貝塚寺内町は寺内の政庁の機能を果たす願泉寺を中 心に三方には一部二重の環濠や土居がめぐらされていた。

以上のように周辺には遺跡が多く分布しており貝塚の歴史を語る上でも重要な地域である。

本発掘調査は貝塚市畠中22-1、22-3における診療所建設工事にあたり、平成18年2月6日に発掘届出書が提出された。平成18年2月13日に建設工事計画に基づいて調査坑を設定し、確認調査を実施した。調査の結果、従前の周辺部の発掘調査で発見した遺構の続きと考えられる溝を確認した。調査後に、設計変更等の協議を実施した結果、建物建設によって遺構が破壊を受ける部分について発掘調査が必要という結論に至り、平成18年3月27日に覚書を交わし、発掘調査は平成18年3月27日~4月7日にかけて実施した。

なお、内業調査については本書刊行をもって終了した。調査にあたっては、医療法人桐葉会 理事長 南良武 氏ならびに関係各位により多大な御理解と御協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査成果

今回の調査は、建物建設により破壊される部分に調査区(135㎡)を設定して実施した。

本調査区の地層堆積状況は、上層より盛土(1、層厚 $0.25\sim0.6~\mathrm{m}$)、耕作土(2、層厚 $0.04\sim0.3~\mathrm{m}$)、にぶい 黄色土(4、層厚 $0.05\sim0.14~\mathrm{m}$)でその下は明黄褐色粘土(7、 $2.5\mathrm{Y}6/6$)の地山土である。4 層は遺物包含層と 考えられ、土師器、瓦器、須恵器、瓦が出土しており奈良時代~中世の遺物が含まれる。

検出遺構(図2、写真1~9)

本調査地は南東-北西方向に地盤が傾斜しており、調査区の南半分は地山が削り取られている部分があり、遺物包含層も存在しない。調査区北側では、遺物包含層が薄く残る部分があり、溝、鋤溝、粘土採掘土坑等の遺構を検出した。

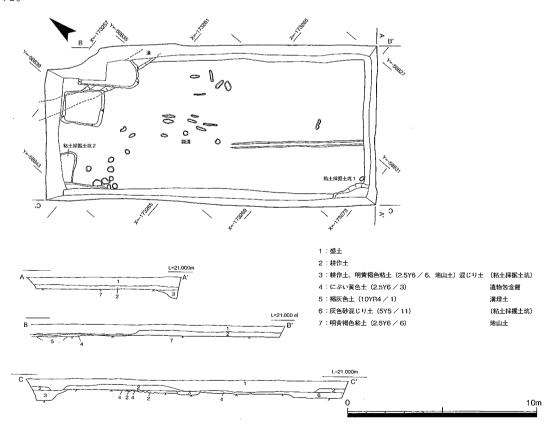


図2 遺構配置・断面図

溝

本遺構は、調査区北部で検出した溝である。幅 $0.8 \sim 0.9$ m、検出長 3 m、深さ 0.2 mである。埋土は褐灰色土(10 YR4/1)で、遺物は出土していない。従前の周辺の発掘調査(1990 年~ 1994 年)で、本溝の続きと考えられる溝を検出しており、奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

平成 2、3年度の仮称市民文化会館の調査で検出したSD-10(貝塚市埋蔵文化財調査報告第26集、1993.3)、平成 3、4年度の都市計画道路文化会館山手線建設に伴う調査で検出したSD-6(貝塚市埋蔵文化財調査報告第30集、1993.9)、平成 5、6年度の保健合同庁舎建設に伴う発掘調査で検出したSD-718(貝塚市埋蔵文化財調査報告第36集、1996.3)が同一の溝と考えられる。遺物は、奈良時代の須恵器、土師器が出土しており、今回検出した溝も奈良時代に掘削されたと考えられる。地山上面が中世の地形改変等によって削り取られている可能性があるが、集落の中心部と考えられるのは今回の調査地から北西方向(溝の続く方向)と考えられ、本調査地は、中心部からはなれた場所で、集落に向けて溝を掘削したと考えられる。

鋤溝

本遺構は、調査区北西部から中央部で検出した鋤溝である。幅 $0.1 \sim 0.2 \text{ m}$ 、検出長 $0.3 \sim 0.5 \text{ m}$ 、深さ $0.03 \sim 0.08 \text{ m}$ である。埋土はにぶい黄色土(2.5 Y 6/3)である。方向は北西 – 南東方向、北東 – 南西方向のものが主である。遺物は瓦器が出土している。時期は、上層が削り取られており、中世〜近世の鋤溝と考えられる。

粘土採掘土坑1

本遺構は、調査区南側で検出した粘土採掘土坑である。検出幅 0.9 m、検出長 2 m、深さ 0.6 mで埋土は耕作土、明黄褐色粘土混じり土 (2.5 Y6/6) である。遺物は土師器、瓦器が出土している。煉瓦、瓦の材料採取のための掘削の場合、広範囲に大規模な掘削を行うが、本土坑の掘削規模から判断して、壁土等の建築資材として小規模に掘削を行ったと考えられる。掘削時期は、掘削の状況、埋土から判断して近世以降に掘削されたと考えられる。

粘土採掘土坑2

本遺構は、調査区北西側で検出した粘土採掘土坑である。検出幅1m、検出長1.7m、深さ0.1mで埋土は灰色砂混じり土(5Y5/11)である。遺物は土師器、瓦器が出土している。掘削の規模、埋土の状況から判断して近世以降に掘削されたと考えられる。

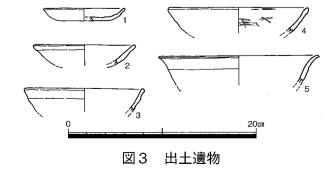
粘土採掘土坑3

本遺構は、調査区南側で検出した粘土採掘土坑である。検出幅 0.2 m、検出長 2.5 m、深さ 0.35 mで埋土は灰色砂混じり土 (5Y5/11) である。遺物は磁器染付、土師器、瓦器が出土している。掘削の規模、埋土の状況から判断して近世以降に掘削されたと考えられる。

出土遺物(図3、写真10~14)

遺物は主に遺物包含層から出土している。1は復元口径 8.4cm の瓦器小皿である。2は復元口径 10.6cm の土

師器小皿である。口縁部をナデで仕上げる。3、4 は瓦器椀である。3は復元口径12.6cmで、口縁部 をナデで仕上げる。4は復元口径14.6cmで、内面 にミガキを施す。5は、復元口径16.8cmの須恵器 坏身である。口縁部は端反で、高台付のものと考え られる。小片であるが、奈良時代のものと考えられ る。6は平瓦片である。凹面に布目痕を有する。調 整等から判断して中世期の瓦と考えられる。



まとめ

調査の結果、奈良時代の溝1条、中世〜近世の鋤溝、近世の粘土採掘土坑3基を検出した。調査区北側で検出した奈良時代の溝は北西方向に流れる。本溝は、これまでの3地点の発掘調査で検出しており、さらに南東方向に溝が続くことが明らかとなった。遺物包含層は、調査区南側では削り取られて存在しないが、調査区北側では0.05~0.14 mの層厚で残り、層内からは奈良時代、中世の遺物が出土しており、中世以降に地形改変が行われ、農地化したと考えられる。近世は、農地であったが、地山の良質な粘土は建築資材等のために採掘されたことが明らかとなった。

次に、本調査地周辺の変遷をみていきたい。本調査地周辺では、発掘調査において飛鳥時代~中世の遺構を検出している。飛鳥時代に集落域となり、溝で囲った建物が建ち、奈良時代につくられた井戸からは祭祀にかかわる遺物や土器が出土している。遺物の中には石帯、円面硯、墨の付着した土器類、緑釉陶器といった役所等の公的施設で使用されたと考えられるものも出土しており、奈良時代から平安時代にかけては一般的な集落でなく、役所等の公的施設が多く存在する場所であったと考えられる。

中世になり、調査地周辺の状況は、一変する。弘安7(1284)年、国衙領から高野山領荘園へとかわり、「近木郷」から「近木庄」へ変わったこと、土木技術の導入により、開墾、地形改変が進められ公的施設のエリアから農地へとかわっていくことがあげられる。旧来の土地区画も改められ、奈良時代の溝と方向は大きくかわり、灌漑用の溝も掘削され、坪境溝と考えられる溝も確認している。

近世〜近代には、瓦生産、煉瓦生産のために、粘土採掘が行われており、その結果、遺物包含層、遺構が削り取られ、近代では広範囲に大規模な掘削により、地形が大きく変化しているところもある。

以上、本調査結果と周辺部の変遷をみてきたが、本調査地と周辺部では同様の変遷過程を経ていることがわかった。限られた面積の調査ではあったが、周辺部の調査成果を踏まえて、総合的に検討していくこと必要である。

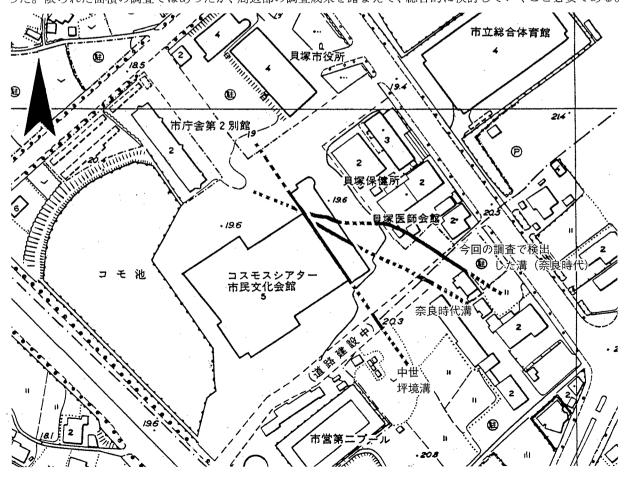


図4 これまでの調査で検出した溝(縮尺 1/2500、北方向は座標北)



写真 1 調査区全景



写真2 鋤溝、溝



写真3・4 粘土採掘土坑1、写真5・6 鋤溝、写真7 粘土採掘土坑3、写真8・9 溝

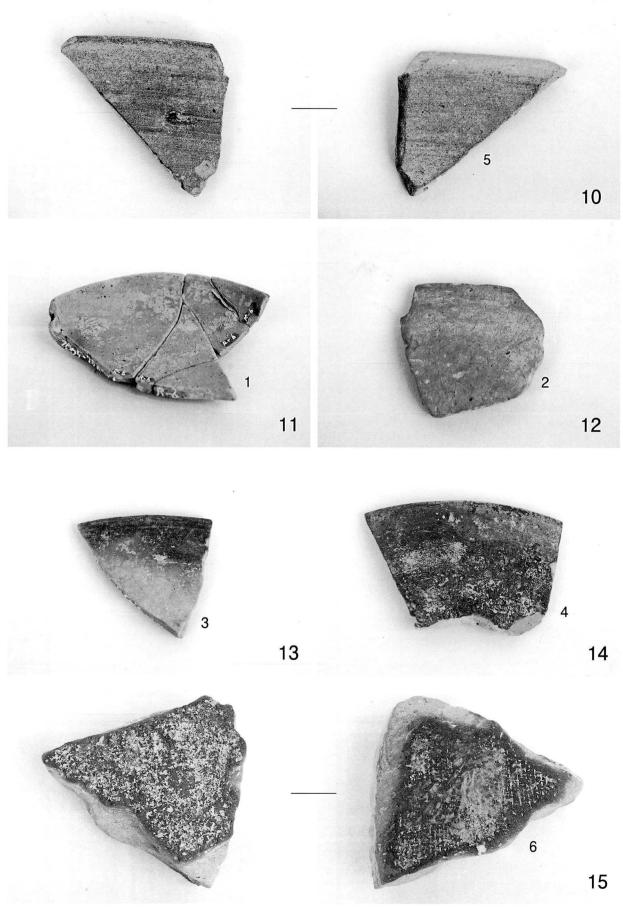


写真 10~写真 15 遺物包含層出土遺物(1~6)

報告書抄録

報告書抄録			•					
ふりがな	かじ・こうざき・はたけなかいせきはっくつちょうさがいよう							
書名	加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要 11							
副書名								
巻 次								
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 74 集							
編著者名	三浦基							
編集機関	貝塚市教育委員会							
所 在 地	〒 597-8585 大阪府貝塚市畠中 1 -17- 1							
発行年月日	西暦 2007 年 9 月 30 日							
; u w y								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	・・コー 市町村	ート 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		110. 3.13	AEM II 7					
かし、こうざき はなけなか 加治・神前・畠中 いせき 遺跡	sasbashudahl 大阪府貝塚市 ukutah 自中	27208	23	34度 26分 11秒	135度 21分 35秒	2006 0327 ~ 0407	135	診療所
ふ り が な 所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
かじ こうぎき はたけなか 加治・神前・畠中 いせき 遺跡	集落跡	奈良時代 中世 近世		溝 鋤溝 粘土採掘土坑		土師器 瓦器 須恵器 瓦		

具塚市埋蔵文化財発掘調査報告 第74集 加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要 11

発 行 日 平成19年(2007)9月30日

編集・発行 貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号

印 刷 摂河泉文庫